

平成30年度
アイランドキャンパス事業成果報告書・提言書

喜界島エコツーリズムカレッジ
(島の環境と観光資源を利用した県内短期大学
共同教育拠点形成の試み)

平成31年2月15日

鹿児島県立短期大学
野呂忠秀・柳田慶一

目次

要約	2
はじめに	3
喜界島エコツーリズムカレッジ（喜界島実習）の実施	4
1 事業企画の背景	4
2 実施報告	5
1) 予備調査	
2) 実施時期の延期	
3) 自然と文化施設の見学	
4) 産業施設の見学	
5) 中国人移住者との懇談会	
6) 奄美サテライト講座	
7) 参加学生の印象	
提言：短期大学生のためのフィールド教育と喜界島	8

資料

- 資料1. アイランドキャンパス事業実施計画書（県離島振興協議会提出）
- 資料2. 喜界島実習案内（参加学生募集）
- 資料3. 喜界島実習旅程
- 資料4. 学生配布資料(1)
- 資料5. 学生配布資料(2)
- 資料6. 学生配布資料(3)
- 資料7. 喜界島実習学生感想文
- 資料8. 喜界島実習写真アルバム
- 資料9. 萩原和己，尾方隆幸(2015)．奄美群島，喜界島におけるジオツアーの開発と実践，琉球大学生涯学習教育センター研究紀要 9: 27-34.(参考文献)

著者

野呂 忠秀（のろ ただひで）：鹿児島県立短期大学学長

柳田 慶一（やなぎた けいいち）：鹿児島県立短期大学事務局次長・総務課長

要約

1. 鹿児島県立短期大学(県短)は、平成30年度アイランドキャンパス事業(鹿児島県離島振興協議会)の支援を受けて喜界島エコツーリズムカレッジ(喜界島(夏季)実習)を実施した。
2. この喜界島実習は平成30年11月21～25日に県短教職員2名と学生5名(含外国人留学生2名)がNPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所を拠点に、喜界島全域において、その自然や文化ならびに地域産業の実情を視察するとともに、地域興しの活動をしている住民団体や中国からの移住者との交流を行うものであった。
3. 県短は、この喜界島実習期間中の11月24日に公開講座(県短奄美サテライト講座)を喜界町コミュニティーセンターで開催した。喜界島における受講者は延べ113名であった。喜界島実習参加学生と教職員はこの公開講座の事務局として公開講座の運営に参加するとともに、町民との交流を行った。
4. 短大生を対象としたエコツーリズムの野外実習は、学生の教養教育の観点はもちろんのこと、地元の資源を活用した社会ビジネスとしても今後の発展が期待される。しかし、少人数の短大スタッフだけでこの事業を継続して行うことは難しく、県内の大学や短期大学などで組織する大学コンソーシアムや他の短期大学との協力も検討されるべきである(提言)。
5. さらには、島内で独自の活動を行なっている住民組織やU/Iターン移住者などとの仕組みづくりも検討されるべきであり、そのための協議会設立などのステージ作り(仕組みづくり)が必要であろう(提言)。

はじめに

鹿児島県立短期大学（県短）ではこれまでも一部の教員によって「観光（ツーリズム）」に関連する研究や卒業論文研究の指導が行われてきた。

また県短は、鹿児島大学をはじめとする県内の国公立大学とともに地域コンソーシアムを組織し、産官学連携の地域再生事業（COC+）にも参画している。その中で、鹿児島大学で開講されるいくつかの授業に学生を派遣するとともに、学外の専門家を講師に招いた講義「鹿児島学」も独自に開講している。

今回は、これら観光学に関する教育研究活動の一環として、学生が地域社会に直接触れ合う野外実習活動（課外授業）を、学生と教員が相互に参加するアクティブラーニング（active learning）の手法によって学ぶための事業を企画した。換言するならば、学生に学外実習の機会を与えることによって、地域の自然や文化や産業活動を学ぶとともに、地域住民との交流を図ろうとするものである。

また、県短が奄美で行なってきた公開講座「奄美サテライト講座」もこのアイランドキャンパス事業の関連行事として開催したので、その結果も報告する。

この事業を行うにあたっては、鹿児島県企画部離島振興課（鳥越哲課長）ならびに鹿児島県離島振興協議会（荒木耕治会長、事務局藤本伸一氏）の支援を受けた（巻末の資料1）。また、NPO 法人喜界島サンゴ礁科学研究所（山崎敦子所長）、鹿児島県大島支庁喜界事務所（井伊和広所長）と喜界島町（川島健勇町長）、松村商店（松村里子氏）や喜界ジョイフル旅行センターの生島常範氏他多くの方々には、喜界島滞在中にお世話になった。この場を借りて深く感謝申し上げます。

喜界島エコツーリズムカレッジ（喜界島夏季実習）の実施

- ・実施期間：平成30年11月21日（水）～25日（日）
- ・参加者：学生5名（文学科1名，第二部商経学科2名，南京農業大学留学生2名）と教職員2名（野呂，柳田）
- ・概要：NPO法人喜界島サンゴ礁科学研究所を拠点とした，喜界島の自然や文化の見学と体験，ならびに地域で活躍する人々と交流するとともに，公開講演会も開催した。

1. 事業企画の背景

本事業を担当した野呂（県短学長）は，かつて鹿児島大学（鹿大）水産学部勤務していた際に，自主講座「奄美の自然と人々」を夏季実習として15年余りにわたり開講していた。年によってはこの夏季実習の舞台を，種子島や与論島に移すこともあったが，主に奄美大島において学部や学年を超えた学生が4泊5日の日程で旅をすることによって，その歴史や自然環境ならびに文化を体験するというものであり，毎年約40名の学生が参加していた。

当初この自主講座は授業としての単位認定を伴わず，参加費用も学生の自己負担ではあったが，後に鹿大教育センターが文科省GPプロジェクトの採択を受けてからは大学がこの経費を支援することになり，更に多くの学生が受講を希望するようになった。

県短においてもこのような自主講座を実施することを考えた野呂は，この事業の前年に当たる平成29年9月に野外実習「奄美の自然と人々」を企画し，5名の参加希望学生との奄美大島旅行を計画したが，奄美諸島に大型台風が直撃したこともあり，中止の止む無きに至った。

鹿児島県人専異動で今年度（平成30年度）から本学の事務局次長兼総務課長として本学に移動した柳田は，前職が鹿児島県奄美市庁喜界事務所長であったことから喜界島の文化や自然環境に精通し，島内にも多くの人脈も持っていた。

また、県短では平成30年度の奄美サテライト講座（出張講演会）を沖永良部島と喜界島で開催することが既に計画されていた。さらに野呂は、長年にわたり海洋生物の研究をしていたこともあり、NPO法人喜界サンゴ礁研究所との縁もあったが、今回、喜界島を舞台に4泊5日の野外実習を企画したことの発端はこれらのつながりを活用したものであった。

当初この喜界島実習は平成30年9月に実施する予定であったが、大型台風が接近したことで帰路に予定していたフェリーの運行が危ぶまれたことからそのリスクを回避するために開講を11月に延期し、参加学生も新たに再募集することとなり、この実習を実施した（資料2）。

2. 実施報告

1) 予備調査

喜界島野外実習を行うに当たって平成30年8月29日に野呂と柳田は現地喜界町での予備調査を行なった。その際、鹿児島県大島支庁喜界事務所、喜界町役場総務課と企画観光課、県立喜界高等学校、NPO法人サンゴ礁科学研究所、町内の観光関係者、水産養殖関係者などを訪問するとともに、見学先の事前調査と公開講座開催の協力を要請した（その際、訪問した海ブドウ養殖業者に対して技術的なアドバイスも行った）。

2) 実施時期の延期

そもそもこの喜界島野外実習は平成30年9月に予定されており、サンゴ礁科学研究所の施設を借りて素潜り（シュノーケリング）の体験講習会を実施する予定であったが、大型台風の襲来で11月に延期された。その結果、夏季実習の主要イベントでもあった体験シュノーケリングは、海水温低下のため中止した。

また、この実施時期の延期により参加学生の中にも辞退者が出たことから、再度参加者を募集することになった（資料2）。

3) 自然と文化施設の見学

本実習期間を過ぎて受け入れ先となっていたNPO法人サンゴ礁科

学研究所では駒越氏（北海道大学大学院）から NPO 活動やサンゴ生態系についての説明を受けた。また、ウフヤグチ鍾乳洞、滝川湧水地、スギラビーチを見学するとともに、県立喜界高等学校では松崎浩隆教頭から、中央公民館では生涯学習課の職員から地域の教育活動の説明をしていただくとともに、川畑氏の高唄演奏を拝聴しいた。また、ハワイビーチ、ムチャカナ公園や地元ガイドによる阿伝集落の町歩き等も体験した。その模様を撮影した写真を資料 8 に示した（以下同様）。

4) 産業施設の見学

産業施設としては、島内に電力を供給する九電新喜界発電所や朝日酒造、松村商店（黒糖菓子をはじめとする土産物の生産と販売）を見学したが、地下ダムと農産物加工場は時間的制約で見学することはできなかった。九州電力においては島での電力供給インフラや台風襲来の実情についての説明を受けた。

5) 中国人移住者との懇談会

喜界島在住で異文化交流に詳しい生島常範氏にお願いして、結婚のために移住した中国系女性 10 名との夕食会を設けていただき、参加学生と懇談した。移住者の多くは中国東北部の出身者であったが、マレーシア出身の中国系女性もいて女子学生との間で会話が弾んだ。喜界町にはこの他に 30 名ほどのフィリピン系女性も結婚のために移住しているようで、このように海外からの移住者を結婚相手として受け入れることによって成り立つ島の社会事情を目の当たりにすることは、今回の実習に参加した学生たちにとっては興味深い事実であった。

6) 奄美サテライト講座

奄美サテライト講座とは平成 26 年度から県短が奄美で開催している講演会である。今回（平成 30 年度）は「知を磨くー学びを重ねながらー」をテーマとし以下のような講演が開催された。なお、この奄美サテライト講座の開催は県短の独自予算でまかなわれたものである。

①沖永良部会場（知名町立中央公民館、

平成30年9月22日（土）9:45-15:30）

- ・岡田登准教授：鹿児島県の農業と食の展開（受講生19名）
- ・倉重賢治教授：統計データとの付き合い方（10名）

②喜界会場（喜界町コミュニティーセンター、

平成30年11月24日（土）9:45-15:30）

- ・楊虹准教授：日本人と中国人の感情表現—映画・ドラマからソーシャルメディアまで（42名）
- ・田口康明教授：日本の教育、世界の教育。鹿児島の教育。そしてちよつとだけ奄美の教育（71名）

7) 参加学生の印象

今回アイランドキャンパス事業に参加した学生の感想文を資料7に示した。それによれば日本人学生はもちろんのことであるが、南京農業大学から本学に留学中でこの実習に参加した学生にはことのほか印象深いものであった。

短大での教育はすぐに役立つ実務的な教育に重心があり、人間力を作る教養教育やフィールド教育の機会が4年制大学に比べて少ない。このことから、アイランドキャンパス事業の支援を受け離島を訪れる実習の意義は大きい。

提言：短期大学生のためのフィールド教育と喜界島

現在日本には300校以上の短期大学があるがその多くは私立であり、公立短期大学はわずかに15校である(20年前は60校もあった)。これらの短期大学は4年制大学に比べその修学期間が2年しかないこともあって、大学で行われている教養教育や自然環境を感じるフィールド教育の機会が少ない。

鹿児島県は奄美をはじめ多くの離島を抱えるが、多くの学生は鹿児島県出身者であっても奄美に旅行した経験がない(そもそも本土在住の鹿児島県民も奄美に行ったことがない人が多い)。今回、喜界島夏季実習を企画するにあたって、参加希望者を募ったが、主催者側の期待に反して希望者はわずか数名であった。また、県内の他の短大関係者にも参加を呼びかけたが参加希望者を集めることができなかった。これは、短期大学の授業カリキュラムが過密状態であり課外活動をカリキュラムに加えることが困難であること、夏季休暇などを利用して自主的に課外活動や旅(特に離島)に参加する希望者が少ないことなど、フィールドに出て汗を流すことや積極的に旅をすることへの学生自身のニーズが低いなどが原因とも考えられる。

参加者を本学だけに限ると、毎年の夏季実習(サマースクール)への参加希望者は4~5名程度であろう。また、日常業務が忙しい教職員に、さらにこのような実習の開講を委ねることも難しい。

しかし、喜界島にはサンゴ礁をはじめとする自然があり、歴史文化的遺産も多い。また、地下ダムやサトウキビ産業など、亜熱帯の風土を利用した人々の活動も盛んである。また、町内にはエコツーリズムの専門家(資料8の執筆者は現在喜界町役場職員という)や、島外からのU/Iターン移住者も多い。

これらU/Iターンの方々の中には、島外で教職をはじめ様々な社会経験を積んだ方や、海外経験も豊富で観光や外国語の通訳の経験者もいる。このように優れた人的資源や、喜界島珊瑚礁科学研究所のようなNPOなどをつな

ぎ合わせて、県内はもちろんのこと全国レベルの短期大学生のためのサマースクールを毎年定期的開催する仕組みを、作り上げることを提案したい。そのためには島内で自主的活動を行なっているグループと短大（大学？）関係者が協議する場（ステージ）を設立するとともに、喜界島の中で社会事業としてエコツーリズムを展開するための仕組みづくりと積極的な活動の開始が、この後継事業として始動することを期待したい。

資料 1. アイランドキャンパス事業実施計画書

(県離島振興協議会提出)

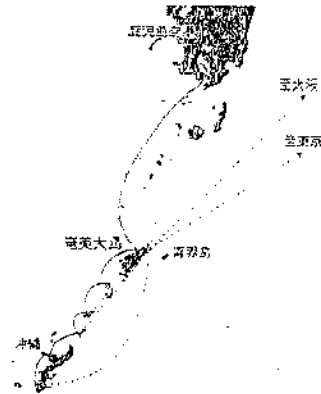
アイランドキャンパス事業実施計画書

事業名	喜界島エコツーリズムカレッジ（島の環境と観光資源を利用した県内短期大学共同教育拠点形成の試み）
選択するテーマ （該当するもの 1つに○印を）	地域資源を活用した新しい特産品開発の方策について 交流人口の拡大を図るための観光振興の方策について ○ その他（離島資源を活用したフィールド教育について）
実施場所	（島名）喜界島 （市町村名）喜界町
実施予定期間	（平成30年度）平成30年9月25日（火）～ 29日（土） （平成31年度）平成31年9月24日（火）～ 28日（土）（予定）
大学等の名称	（大学等の名称）鹿児島県立短期大学（県短） （住所）〒890-0005鹿児島市下伊敷一丁目52番1号 （電話）099-220-1111（内線100） （FAX）099-803-4473 （Eメール）noro@k-kentan.ac.jp （学部長名）野呂忠秀（学長）
参加予定人数等 （予定）	教授・講師等（3）名 代表教官名：野呂忠秀（専攻：水産増殖学，海洋生物学） 学生等（7）名 計（10）名
目的	短大生を対象とする奄美エコツーリズムのフィールド教育拠点を NPO 法人喜界島サンゴ礁科学研究所（喜界町）に設け、喜界島の自然や文化を材料とした合宿体験型教育を展開する。については、事業1年目（平成30年）には喜界島でエコツアーを県短生対象で実験的に開講し、その有効性を検証する。事業2年目（平成31年）には、鹿児島県内の他の短大生からも参加を募り事業展開を図る。将来的にはこの事業を喜界島における全国的なサマースクールにまで発展させることによって、全国の短大生が毎年喜界島に集い共同で奄美の自然と文化を体験する仕組みを構築する。
事業内容 （別紙での記載可）	（平成30年）県短生による奄美エコツアーの試行（添付資料あり） ・ 学生による喜界島エコツアー（喜界島サンゴ礁科学研究所でサンゴの生態学を学ぶと共に体験ダイビング（シュノーケリング）で多様な海洋生物の世界を体験する。また島内の農業や水産業の実情を見学し、喜界町役所では地域起し協力隊や住民と交流し島の民族や文化、自然史の説明を受け離島の現状を把握し問題点の検討を行う。 ・ 奄美大島で暮らす短大卒業生との交流会実施、離島の暮らしを開取調査。 ・ 9月29日に喜界町で開催予定の県短奄美サテライト講座（2名の教員による公開講座）とも連動させる。 * 必要経費として、教員旅費（鹿児島市～喜界町、3名、4泊5日12万円）、マイクロバス借上代10万円、報告書印刷費等3万円、計25万円助成希望。 （平成31年）喜界エコツアーを県内短大生のサマースクールとして展開 ・ 鹿児島県内の他の短期大学等にも参加者を募り、前年度に試行した喜界島エコツアー等を実施する。このノウハウを次年度以降にも継承し、県内外の短大が毎年夏に共同で行う合宿体験型のサマースクールの開講を提案する。
事業成果の地元への還元方法（シンポジウム等）	毎年度末に報告書『喜界島エコツーリズムカレッジ（仮）』を作成し、県庁や関連市町村等に事業の成果を還元する。また、県短が独自に開催する奄美サテライト講座において地元への還元を行う。さらにこの事業成果は鹿児島県が鹿児島大学・県短等と行っているCOC+事業として行政機関や教育機関のセミナーなどでその成果が公表される予定。
これまでの離島における取組実績等（他県での実績も含む）	申請者（代表教官）は、これまで①鹿大において喜界島や奄美土浜産海藻ソノハナから黄色ブドウ球菌やジャガイモソウカ病に有効な生理活性物質を発見し、5年間にわたって国土交通省の研究費を受け、奄美広域事務組合とともに共同研究を行った。また②奄美大島で毎年夏に学生40名を対象とするフィールド教育「奄美大島の自然と人々」を10年余にわたって開講、③鹿大附属国際島嶼教育研究センターでは奄美において数多くのシンポジウムや講演会を主催するとともに同センター奄美分室の設立に深く関係した。④文科省研究拠点形成費等補助金（教育研究高度化のための支援体制整備事業）国際島嶼・環境・医学教育研究支援プロジェクト（予算規模3億円）代表者として、奄美研究を支援。

資料 2. 喜界島実習案内 (参加学生募集)

「喜界島夏季実習」案内 v.6

喜界島どこ？



担当：野呂忠秀（学長）

email: noro@k-kentan.ac.jp, 緊急連絡：09074495763

(1) 趣旨

喜界島において奄美島嶼域の自然と人々の暮らしを体験するためにこの実習を行う。

(2) 参加者

学生 5名

教職員 2名 野呂（学長）、柳田次長（前大島支庁喜界事務所長）

(3) 費用

約3万円

(4) 旅程

- ・ 日程：11月21日（水）～25日（日）、4泊5日（船中2泊を含む）
- ・ 行先：鹿児島県大島郡喜界町（喜界島）全城
- ・ 宿舎：NPO 法人喜界島サンゴ礁科学研究所（学校後、寝具、エアコンあり）
- ・ 島内での移動はレンタカーを予定

11月21日(水)	16:30 17:30	鹿児島本港北埠頭北埠頭ターミナル集合【時間厳守】 鹿児島本港出航（フェリーあまみ、㊤ライン）
11月22日(木)	04:30 09:00 14:00	喜界島着、喜界サンゴ礁科学研究所 投宿 講義：サンゴ礁生態系+体験シエノーケリング 見学：喜界島役場、島興し協力隊等との交流支庁、朝日酒造他（順番などは変更の可能性あり）
11月23日(金)	09:00 18:00	見学：埋蔵文化財センター、巨大ガジュマル他【野呂合流】 土嘉鉄での島遊び
11月24日(土)	09:00 13:00 21:00	見学：俊寛墓 阿伝街歩き、中国系住民交流など 喜界島フェリーターミナル発（フェリーあまみ、㊤ライン）
11月25日(日)	08:30	鹿児島本港北埠頭着

(5) 所持品

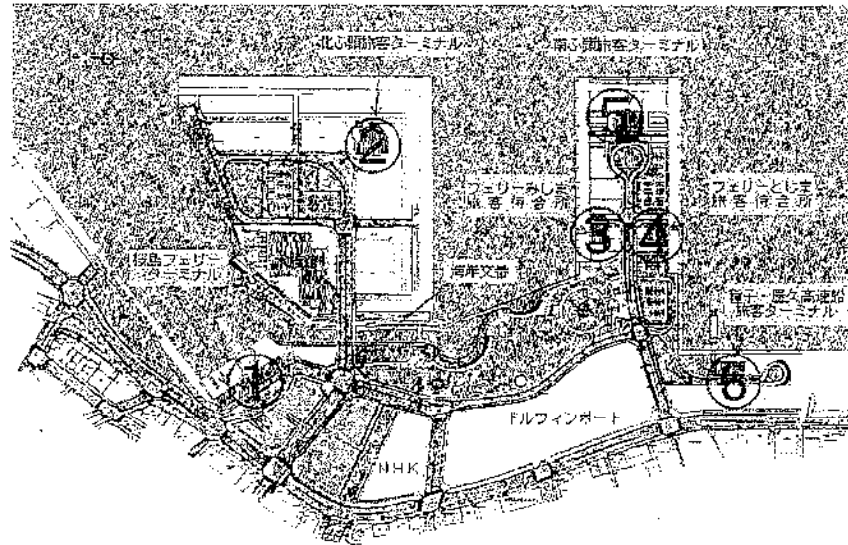
帽子、日焼け止め、着替え、夜寝る時着るもの、洗面具、雨具（必要に応じて）、洗面道具、現金（3万円++）、カメラ（あれば）、保険証、筆記用具、ノート（メモ帳）、携帯電話充電

- 器、水着（Tシャツ、短パン、ビニール袋、軍手必須）、Cashカード（必須ではないが）
- * 洗濯洗剤、虫さされスプレー、かゆみ止め、正露丸、風邪薬、頭痛薬、傷薬は主催者用意。
 - * ラジオがあれば奄美・沖縄。台湾の放送が楽しめる。
 - * 学割証（フェリー乗船に必要）は教員が一括申請します。

(5) その他

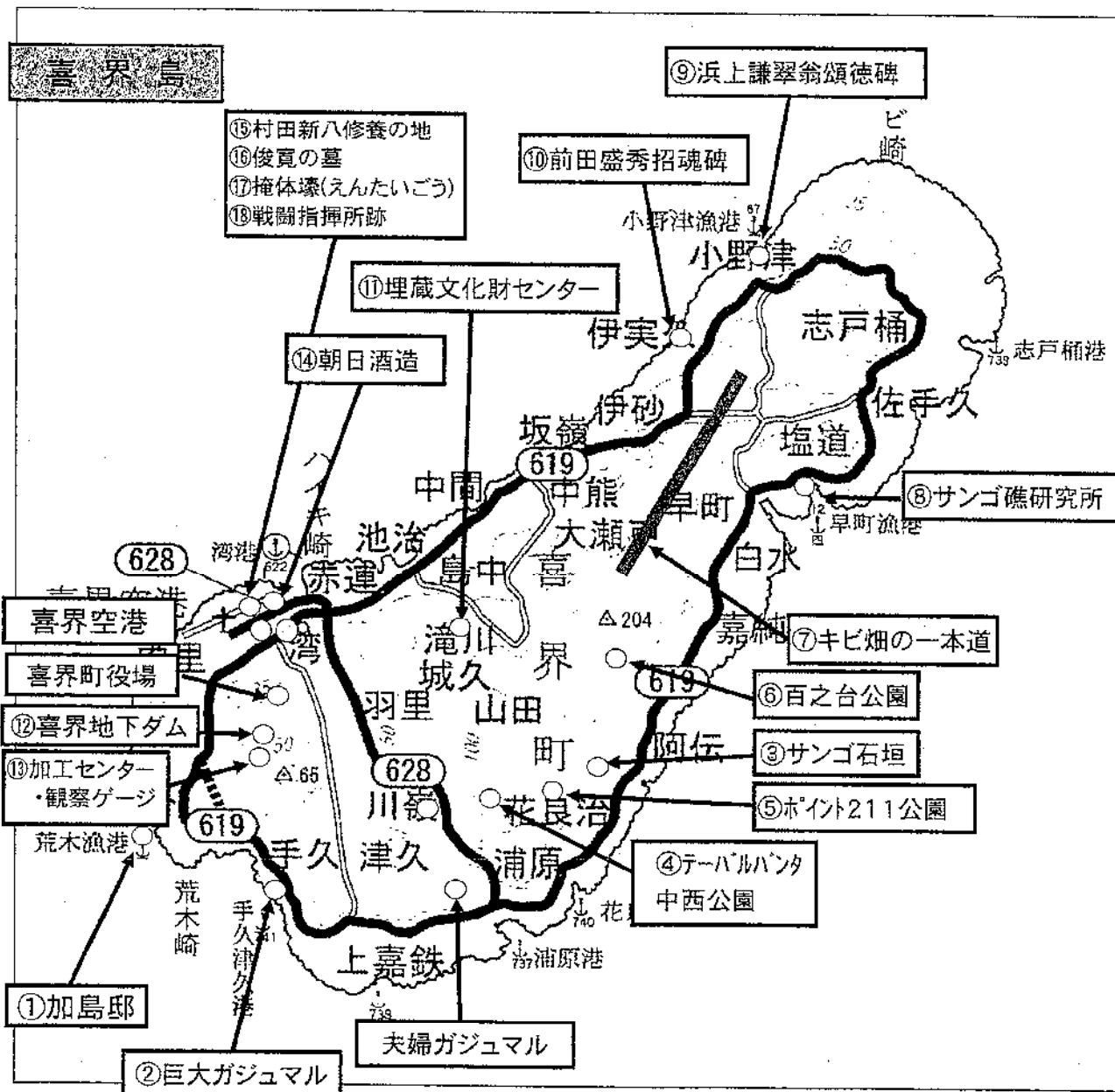
- ・ 後日報告書を作成する時に掲載するための「報告文 (1p.)」を分担して執筆して。
- ・ 学生傷害保険加入必須（個人的に加入した傷害保険でも良い）
- ・ この実習への参加については保護者に十分説明し、許諾を得ること。

11月21日（水）16：30鹿児島本港北埠頭旅客ターミナル②集合（5分前までに集合）
鹿児島水族館イオワールド・桜島フェリーターミナルから徒歩10分



- ・ この実習は県短の公式行事ではありませんので、事故などに関して鹿児島県立短期大学は一切の責任を負いませんことをご理解の上、参加してください。
- ・ 台風などに備えて実施の最終決定は18日（日）昼12時に行い、主催者側からeMailで送信します。
- ・ 参加者への今後の連絡はすべてeMail:noro@k-kentan.ac.jpを通じて行いますので、着信したら確認メールをお願いします。

喜界島視察等位置図



資料 3. 喜界島実習旅程

アイランドキャンパス事業行程表(結果)

H30.11.27

	11月21日(水)	11月22日(木)	11月23日(金)	11月24日(土) (奄美サテライト講座当日)
4:00		・4:30着, レンタカー受取		
5:00		・サンゴ礁研究所着		
6:00				
7:00				
8:00		(朝食)各自	(朝食)各自	(朝食)各自
9:00		※サンゴ研説明(駒越) (8:30~9:15)	・サンゴ研発	・サンゴ研発
10:00		・サンゴ研発	・空港迎え(学長, 楊先生)	・サテライト講座受付など
11:00		・九州電力新喜界発電所 見学 (9:30~10:15)	・松村商店(黒糖製造)見学 (9:30~11:00)	・サテライト講座(冒頭参加)
		・喜界高校視察(松崎教頭) (10:35~11:30)		・俊寛の墓, メンハナ公園
			・米須里之子の墓(佐手久)	・掩体壕(エンタイゴウ)
12:00		※(昼食)スギラビーチ(弁当)	・平家上陸の地(志戸桶) ※ハワイビーチ(小野津)	(昼食)サテライト会場(弁当)
13:00		・中央公民館見学・体験(生涯学習課) (13:00~14:30) 併設博物館見学	(昼食)きよらハンズ(松村商店内)	・サテライト講座(冒頭参加)
14:00		島唄鑑賞・太鼓体験(14:00~30)	・朝日酒造見学(黒糖焼酎製造)(14:00~15:10)	
15:00		・喜界幹部派出所視察(田島所長説明) (14:30~15:20)		※百之台
16:00		・喜界町役場視察(豊補佐) (15:30~16:00) (サテライト講座事前準備)	※阿伝まち歩き(武田さん) (15:25~16:25)	※きび畑の一本道 (サテライト講座片付け)
17:00	・現地集合(鹿児島港北埠頭)	・町役場ツアー説明(萩原主事) (16:25~16:40) ※ウフヤグチ鍾乳洞 ※湧川(湧水)	・旧阿伝小(奉安殿) (サテライト講座事前準備) (17:00~18:00)	※荒木漁港, 加島駅 ・赤連通りまち歩き
18:00	・17:30出港(フェリーあまみ)	・船内学習(資料による)	・村田新八修養之地 (夕食)在島中国人との交流会(ニュー憲)	(夕食)朝花
19:00		・サンゴ研着		
20:00				(湾港へ移動)
21:00			・サンゴ研着	・21:00出港(フェリーあまみ)

※ ジオツアー (石垣, 湧水, 鍾乳洞, 海成段丘)

県短喜界島実習(11/21-11/25)参加者名簿

氏名	学科専攻	学年	所属ゼミ
(学生)			
富永 菜々花	文学科 日本語日本文学専攻	2	望月
竹下 舞優	二部 商経学科	2	田口
寺地 菜々子	二部 商経学科	2	田口
張 榎 子ヨウ ク	南京農業大学(留学生)		楊
別 享鑫 ベツ キョウキン	南京農業大学(留学生)		楊

(教員)

野呂 忠秀	学長		
-------	----	--	--

(事務局)

柳田 慶一	事務局次長		
-------	-------	--	--

資料 4. 学生配布資料 (1)

平成30年度 アイランドキャンパス事業

I 日 時

平成30年11月21日（水）～25日（日）

II 場 所 大島郡喜界町

III 事業名 喜界島エコツーリズムカレッジ (島の環境と観光資源を利用した県内短期大学 共同教育拠点形成の試み)

(I)	喜界島の概況	1	～	6
(II)	喜界島の観光	7	～	12
(III)	喜界島の再生可能エネルギー等	13	～	14
(IV)	喜界高校生の職場体験学習受入	14		
(V)	喜界島の文学	15	～	20

I 喜界島の概況

1 位置 (資料P1参照)

喜界島は鹿児島県の奄美群島に属し、鹿児島市から南へ約380km^{*1}、奄美大島の東方約25kmの太平洋上に位置する。(奄美市から69kmの洋上)

^{*1}(1) 喜界島 ⇔ 鹿児島 約380km

- ・ ⇔ 鹿児島 ~ 山口県宇部市 (陸路で北上すると)
- ・ ⇔ 大阪 ~ 松本, 静岡
- ・ ⇔ 東京 ~ 名古屋, 仙台

(2) 喜界島 ⇔ 大阪 約930km

- ・ ⇔ 大阪 ~ 函館 (929km)
- ・ 大阪 ~ ソウル (836km), 大阪 ~ ^{ピョンヤン}平壤 (990km)

(3) 喜界島 ⇔ 東京 約1,300km

- ・ ⇔ 東京 ~ ^{ピョンヤン}平壤 (1,292km)
- ・ 東京 ~ ソウル (1,159km), 東京 ~ ^{シャンハイ}上海 (1,765km)

2 面積等 (資料P2参照)

隆起サンゴ礁の島^{*1}で周囲48.6km, 面積56.97km²(国土地理院H28)の島。険しい山や河川はなく, 中央部には段丘^{*3}が広がり, 一番高いところでも標高は211m^{*4}しかなく, 平坦な島。集落はほとんどが海岸線に点在。

^{*1}(1) 隆起サンゴ礁の島で, 奄美諸島の沖永良部島, 与論島と同じくハブのいない島

サンゴ礁地域の地盤が上昇することによって, サンゴ礁が現海面より上にみられる場合, 隆起サンゴ礁または離水礁島などという。数万~数十万年前のサンゴ礁が陸上で確認できる, 地球上で3本の指に入る隆起速度の場所(現在も年平均約2mmの速度で隆起(P40参照)しており, その隆起スピードは世界トップクラス)。カリブ海のパルバドス島, パプアニューギニアのヒュオン半島と並ぶ国際的にも希少な隆起サンゴ礁で形成された島

(2) 特定非営利活動法人(NPO)喜界島サンゴ礁科学研究所 (P資料3,4参照)

⇒ 主要メンバーは北海道大学^{*}理学部関係者

H26.7任意団体「喜界島サンゴ礁科学研究所」設立, 調査研究開始, H27.10法人認証 (活動状況) 喜界島を拠点に世界中でサンゴ礁調査を実施(H28.5.28TBS世界遺産で, ソロモン諸島レンネル島(サンゴ環礁が隆起した島で世界~大きい)の監修をした)。海洋観測, 科学試料の保管・ライブラリー, 科学教育・普及 ⇒ 注目を集めている団体

^{*} 北海道大学 前身「札幌農学校」初代校長調所広文(ちょうしょひろたけ; 調所広郷三男)

^{*2}(1) ほぼ同じ面積の島など

①沖縄県久米島(58.94km²), ②琵琶湖の南湖(58km²; 最狭部に架かる琵琶湖大橋を挟んだ北側部分→北湖(太湖;面積623km²), 南側部分→南湖, 総面積681km²)。

(2) 大きな島

- ③奄美大島(712.52km²)約12.5倍, ④徳之島(247.9km²)約4.4倍, ⑤沖永良部島(93.6km²)約1.6倍,
- ⑥屋久島(502.9km²)約8.8倍, ⑦種子島(447.1km²)約7.9倍, ⑧淡路島(592.55km²)約10.4倍,
- ⑨佐渡島(854.07km²)約14.9倍, ⑩対馬(696.10km²)約12.2倍,

- ①天草下島(573.91km²)約10.1倍
(3) 小さな島など
②与論島(20.58km²)約2.7分の1, ③東京ドーム(0.047km²)約1,200分の1

※³(1) 階段状の地形。サンゴ礁隆起(資料P6参照)

(2) 約12万年前に渡る断続的な隆起活動の結果、現在は大きく**4段の階段状地形**を成している。

① 上位段丘(海拔約150m以上)は、一般に百之台地と呼ぶ地域で、湧水もなく風当たりも強いので集落は立地しない。

② 中位段丘(海拔110m前後)は、狭い地域で、城久・滝川・長嶺集落がこの段丘上にある。

③ 下位段丘(海拔80~20m)は、最も広い段丘で、城久より一段下って西側に山田・川嶺・羽里集落があり、南西側の浦原・先山集落側では典型的な海岸段丘(地元通称; テーパルバンタ; P23参照)になっている。滝川より東側に一段下って、島中・大朝戸・西目集落があり、また、百之台から北東方向へのびる緩傾斜地の縁に伊実久集落がある。

④ 後氷期段丘(海拔20m以下)は最も新しく、今から約6,000年前頃から隆起サンゴ石灰岩により形成された段丘で、海岸線に沿って24集落がここにある。(喜界町史から引用)

※⁴ ポイント211(七島鼻); 211.96m, 百之台; 標高203m

3 人口 (P資料5,6参照)

平成29年12月31日現在の人口は、7,242人で長期的に減少しており、終戦後のピーク時、昭和23年頃には約20,000人が居住していたが、近年は若年層の流出が続いている。

また、高齢化率は36.7%であり、県(29.4%)・郡平均(31.3%)より高くなっている状況。

なお、県統計課推計人口調査結果^{※1}(平成29年12月1日現在)では、6,966人と7,000人を割っている。

※¹ 国勢調査による人口を基に、その後における各月の人口の動きを他の人口関連資料から得て、毎月1日現在の人口を算出している。

平成29年12月1日現在(世帯数; 3,257世帯, 男; 3,398人, 女; 3,568人, 合計; 6,966人)

4 道路 (資料P2参照)

島内37集落のうち、多くの集落は海岸線に点在しているが、これらを結ぶ一般県道として、島内を一周する「喜界島循環線」約32kmと東西をつなぐ「浦原喜界空港線」約8km(総延長約40km:改良率91.3%, 舗装率100.0%)のほか、町道・農道等の整備も進んでいる。

5 港湾施設 (資料P2参照)

県管理の港湾施設として、定期船の就航する「^{わんこう}湾港」^{※1}(5,000トン級岸壁2バース)がある。農産物や生活物資等の搬出入に重要な役割を果たしている。

また、漁港施設として「湾港」の補完港・避難港ともなっている「早町漁港」(5,000トン級岸壁1バース)がある。両港とも水深7.5m。

- ※1 ・ H27年度,28年度入港 ばしいふいっくびーなす (日本クルーズ客船所有;日本籍で2番目に大きなクルーズ船 26,594t ; 喫水6.5m)
- ・ H29年度入港 にっぼん丸 (商船三井客船所有 ; 22,472t ; 喫水6.6m)
- ・ 日本籍で1番大きなクルーズ船 ⇒ 飛鳥Ⅱ (郵船クルーズ(日本郵船子会社)所有 ; 50,142 t ; 喫水7.8m)

6 海上交通路 (資料P2参照)

航路は、鹿児島、奄美大島、徳之島等との間に、上り下りそれぞれ週5便の定期船「あまみ」と「きかい」の2隻(約3,000トン)が交互に運航している。

北西の季節風が強い冬場を中心に、定期船が接岸できないことも多く、島の北東部にある「早町漁港」を年間50回あまり(H27年度52回,H28年度47回)利用している状況。

平成27年度の利用者は、約2万9千人となっている。(前年+約1,000人)

7 航空路線 (喜界空港) (資料P 2, 7 参照)

喜界空港^{※1}は、昭和43年5月1日開港(滑走路1,200m×30m)の地方管理空港であり、現在、鹿児島空港との間に1日2往復、奄美空港との間に1日3往復それぞれサブ機^{※2}(36席)が就航しており、島民の足として、また、喜界島の経済浮揚と地域振興に重要な役割を果たしている。

平成27年年間利用者数は、約80,000人^{※3}となっている。(前年+約4,000人)

現在のターミナルビルは、昭和58年に建設され、平成20年度にトイレ等の拡張整備が行われ、平成21年度以降、利用者の交通事故防止・安全確保、バリアフリー化の観点から、構内の道路と駐車場の分離及び歩道・ルーフ等の設置を行った。

※1 喜界空港の特徴はなんといっても親しみやすさ。平屋のターミナル施設はバスの待合室のような和気あいあいとした雰囲気。隣には高倉をイメージした屋根付きベンチシートがあり、フェンス越しわずか10数メートル距離に飛行機が止まる。見送り客が多いと、離陸のため動き出した機は滑走路に向かう前に、その場で8の字に回る。左右の窓際に座る乗客が、それぞれ見送りの人々を見られるように行う機長の粋な計らい。通称「喜界ターン」。始まった時期は定かではないが、空港の名物となっている。(H28.6.28南日本新聞16面)

※2 平成29年12月からATR42-600型機(48席)が就航。

※3 奄美群島振興交付金を活用した条件不利性改善事業による航空運賃、航路運賃の軽減により利用者が増加したものとみられる。

8 農業関係 (資料P8参照)

(1) 基盤整備関係

土地基盤整備が進み、耕地率は、39.5%(面積2,252ha)と耕地に恵まれている。農家^{※1}1戸当たりの耕地面積は3.30haと奄美群島内で最も広く、サトウキビ^{※2}を基幹作物とした農業が主な産業になっている。

平成15年度に国営のかんがい排水事業による地下ダム^{※3}が完成してから、現在、計画給水面積2,120haのうち1,689ha(県営伊坂等含む; 79.7%)に給水を行っている。

平成28年度からは、国が第2地下ダム建設に向けた調査を実施しているところ。(平成30年度まで、新規受益面積約600ha)

(2) 農業普及関係

畑かん営農推進重点作目の作付け面積は、平成27年度において、サトウキビ(1,747ha)、飼料作物(250ha)、ごま(22ha)、カボチャ(20ha)の4品目で約98%(4品目面積2,039ha/総面積2,087ha)を占めている。

(3) 作目別の生産額 (資料P8参照)

平成27年度の農業産出額は、約28億7千万円、前年度に比して約4億5千万円増となっている。

内訳としては、サトウキビが16億4千万円の約58%を占め、次いで、肉用牛が8億5千万円の約30%、その他野菜、花きなどとなっている。

特色としては、ゴマの産出額が台風被害で落ち込んで約5千万円となっているが、白ゴマの生産量は全国第1位である。

現在、生産性の高い営農を確立するため、野菜、花き等の実証ほ設置をはじめ、畑かん水質保全と環境保全型農業を推進するという面から、サトウキビに対する緩効性肥料(窒素系肥料をコーティング)の実証と利用促進に努めているところ。

※1 農家数621戸(P21参照; H27世界農林業センサス)、林野面積894ha(H27年度県林業統計)

※2 島内の生和糖業(株)(三井製糖子会社)でザラメに精製されるものがほとんど。小規模で黒糖製造をしているところ(20箇所?)もある。

【サトウキビから作られるものとして】黒糖焼酎は、奄美群島のみ製造が許されている焼酎で、島内には①朝日酒造と②喜界島酒造の2つの酒造会社がある。レギュラー酒は①「朝日」、②「喜界島」。

プレミアム酒としては、

①朝日巻乃釀(黒麹)、朝日飛乃流(白麹)、南の島の貴婦人(はなたれ44度)、陽出る國の銘酒(毎年製造、5年熟成(5年後出荷する際は製造年を刻印)、白麹、喜界島自家黒糖、国産米、42~44度、360ml)

②しまっちゆ伝蔵、特攻花、俊寛、せいら等があるが、おすすめは、三年寝太蔵(3年古酒主体

に5~10年古酒をブレンド、30度、720ml)、キャプテンキッド(43度、7年以上貯蔵熟成)

※3 地下ダム(国営かんがい排水事業喜界地区) (資料P9参照)

H4年度着工、H15年度完成。総事業費251億円。堤体長(止水壁全長)2,280m。地下ダムの止水壁が築造されている水天宮^{すいてんみやう}一体は、砂丘防風林としての役目のほか、オオゴマダラ^{おおごまだら}* (保護蝶)の生息地でも知られていたため、同地を保護するために366mの間をトンネル内から止水壁を施行するという、全国で初めての工法を取り入れ環境に配慮した。トンネル内は止水壁の一部となっている。

* オオゴマダラ蝶(大胡麻斑蝶) ⇒ 喜界島が北限(資料P10参照)

マダラチョウ科で、羽には白地に黒の斑模様、羽を広げると15cmもある日本の蝶としては最大級の美しい蝶。幼虫の食草であるホウライカガミは、キョウチクトウ科の植物で、葉や花には毒性のあるアルカロイド(植物の体内に含まれる毒素を含むアルカリ性の有機化合物の総称。多くが毒性や特殊な生理・薬理効果を持つ。アルカリ性を示すので、「アルカリもどき」を意味するのでアルカロイドの名がある。)を含んでおり、幼虫はその葉を食べることで毒を体内にため込む。この毒は黄金色の蛹(ササ)や成虫にも残っており、他の動物から捕食されることを防いでいる。天敵がいないためなのか、優雅に舞う姿は美しく、「南の島の貴婦人」とも呼ばれている。また、ゆっくりと羽ばたき、フワフワと滑空するような飛び方や羽の様子が新聞紙が風に舞っているように見えることから、「新聞蝶」と呼ばれることもある。

また、喜界島には「蝶ロード」と呼ばれる道があり、オオゴマダラやアサギマダラなどの蝶はもちろんのこと、とても珍しい標識(蝶に超注意)を見ることができる。

9 歴史 ((資料P11~P16参照；本文は、概ね「喜界町観光振興計画」一歴史と文化一から引用)

古代の喜界島では、縄文土器や磨製石器が使われ、竪穴式住居が作られていたことが島内の遺跡からわかっている。多くの夜光貝や夜光貝を加工して作られた貝匙^{かいさし}も遺跡から出土している。

8~9世紀からさまざまな文化の交流をもつ史跡と伝承などの歴史資源^{しりょう}*が残されており、奄美や沖縄との交流文化を育みつつ、喜界島独自の文化をもっている。

本土では室町時代にあたる文正元(1466)年、喜界島は琉球王尚徳^{しやうとく}*²によって侵攻され、その後、約150年間、琉球国の統治下にあったが、慶長14(1609)年、薩摩藩の琉球侵攻によって、琉球から分割され薩摩藩^{さつまはん}に属することになった。

藩政時代は、島内に代官所が置かれ、代官の下に大親役^{おほのおや}*³と称される役職が整備され島政が行われた。後年、大親役は与人役^{うりひと}~横目^{よこめ}という役職に変わる。

明治2(1872)年、代官所が在番所に改められ、明治19(1886)年になると、湾と早町がそれぞれ村政となり、明治41(1908)年の島しょ町村制の施行によって湾と早町が合併し、喜界村となった。

大正8(1919)年、喜界村と早町村の2村に分村し、昭和16(1941)年の町政施行によって喜界村は、喜界町になった。昭和20(1945)年の太平洋戦争当時は、喜界島も空襲に遭い(資料P15,16参照)、多くの家屋が焼失している。

終戦後は、昭和21(1946)年の連合軍最高司令部覚書により、本土と行政分離され北部南西諸島軍政府が開設され、昭和25(1950)年に奄美群島政府が置かれ

た後、昭和28(1953)年12月25日、日本に完全復帰をした。

また、同年施行された町村合併促進法に基づき、昭和31(1956)年9月10日に喜界町と早町村が合併し現在の喜界町が誕生した。

※1 遺跡からは白磁やガラス玉、徳之島で焼かれていたカムイヤキ、役所の跡等限られた場所
でしか見つからない越州窯系青磁(中国、浙江省を中心に発達した東洋最古の磁窯、およびそこで産した青磁。越磁と呼ばれる。この地方は古く越国と称したのでこの名がある。起源は漢代末で、1930年以来、杭州
一帯で徳清窯、九巖窯、福建の南台窯など漢、六朝時代の窯址が発見された。)などが見つかっている。当
時、城久遺跡群は奄美・沖縄諸島にとどまらず広く東アジアの交流に重要な役割を果たして
いたのではないかと考えられている。

- ・ 城久遺跡群) 南西諸島最大の遺跡群。高台にある城久集落の周辺に8～14世紀頃の大集
落跡が発見され、建物跡や墓跡(人骨に銅鏡)、1000年前の交易拠点ではないかと思われ
る陶磁器類が多数出土し、発掘調査が続いている。
- ・ 中増遺跡群; 手久津久地区) 南西諸島では初めての完全形の銅鏡(H27.5)と破片の銅腕
(H27.9)が出土。
- ・ 俊寛が流された(鹿ヶ谷事件; 1177年)鬼界ヶ島の場所については、喜界島(資料P14参照;
僧俊寛の像)、鹿児島郡三島村の硫黄島、長崎県長崎市の伊王島など諸説ありはっきりし
ていない(ほぼ硫黄島に間違いのないといわれている)。

また、ひそかに島を脱出したという説も多く、鹿児島県阿久根市や出水市、佐賀県佐賀
市などにも俊寛に関する言い伝えが残っている。

中村勘三郎が、三島村の硫黄島の砂浜で野外歌舞伎として「平家女護島俊寛(近松門左
衛門の人形浄瑠璃; 1719(享保4)年8月12日大阪竹本座初演)」を上演したのが1996年(H8; 勘九郎
時代)5月29日と2011年(H23)10月22日の2回。

※2 尚徳は、尚泰久王の第三王子として、1441年に生まれた。父王の薨去後、妾腹
でありながら長兄・金橋王子を退けて、即位した。金橋王子の母は王妃であったが、謀反の
嫌疑をかけられた護佐丸の娘であったことから、即位できなかつたと見られている。翌年に
は、明から冊封を受けた。マラッカに使者を派遣し交易を始め、市場を拡大させた。北は日
本、朝鮮、南はマラッカ、シヤムと琉球は中国交易を中心とした、大交易時代でもあった。

1466年に国王自ら2,000の兵を率いて喜界島へ遠征し、琉球王国の領土に加えた。国王
自ら軍を率いて討伐に向かうのは、祖父・尚巴志王以来のことであった。この遠征の強行
などの政策によって重臣の信頼を次第に失ったのが、死後の政変に繋がっていったとされる。

1469年、29歳の若さで急逝。

※3 代官の下に六間切(①志戸桶、②東(早野、嘉鈍)、③荒木、④湾、⑤西目、⑥伊砂)に分け大親(ウフヤ、ウ
フヤコ、フーヤ)役をおいて島政を行なわせた。間切の長。間切内の事務を総監した。「与人」「横目」

II 喜界島の観光

1 喜界町観光振興計画

(1) 目的

喜界町の交流人口拡大に向け、喜界町を取り巻く環境や課題等に的確に対応し、関係者間の協力のもと中長期的視点に立って観光振興に取り組むことを目的として平成29年3月に策定（⇒ 町HPに掲載されている）。

(2) 計画の位置付けと計画期間

喜界町の観光振興へ向けた方針や目指すべき方向性、計画を実現するための具体的な取組内容と島内関係者による実施体制等を取りまとめたもの。

計画期間は、平成29年度から平成33年度までの5年間。

(3) 喜界町の観光の現状と課題

喜界町の観光の魅力を踏まえ、喜界町の観光の現状と課題について、各種調査結果や策定委員会からの意見等をもとに、喜界町がSWOT分析^{※1}による整理を行った。

※1 SWOT分析とは、目標を達成するために意思決定を必要としている組織や個人のプロジェクトやベンチャービジネスなどにおいて、外部環境や内部環境を強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）の4つのカテゴリーで要因分析し、事業環境変化に対応した経営資源の最適活用を図る経営戦略策定方法の一つである。

内部環境(強み/弱点)	外部環境(チャンス/脅威)
喜界島の強み/Strength <ul style="list-style-type: none"> ・学術的価値の高い資源 (燐鉱、ハマサンゴ 等) ・島の全体の景観が美しい (日本で最も美しい村連合 加盟) ・ブランド力のある農産物生産 (白ゴマ、在来品種の野菜、柑橘類 等) ・特徴的な農業インフラ(地下ダム) 	喜界島に訪れるチャンス/Opportunities <ul style="list-style-type: none"> ・奄美大島、徳之島、沖縄県北部及び西表島の世界自然遺産登録 ・奄美群島のメディア露出増加による注目度の上昇 ・航空機材の容量増加 ・LCCによる奄美大島の来島者増加 ・島外食産企業の進出
喜界島の弱点/Weaknesses <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊施設不足 ・情報発信不足 ・正確な観光統計データ不足 ・収益性の高い観光コンテンツが未整備 ・航空運賃が高い ・船舶の入出港時刻が夜間や早朝 	喜界島で懸念されるマイナス要素/Threats <ul style="list-style-type: none"> ・夏季の台風襲来と台風の大規模化 ・特化や露骨の天候悪化による欠航 ・国内観光市場の縮小見込み ・ビジネス客の増加による座不足

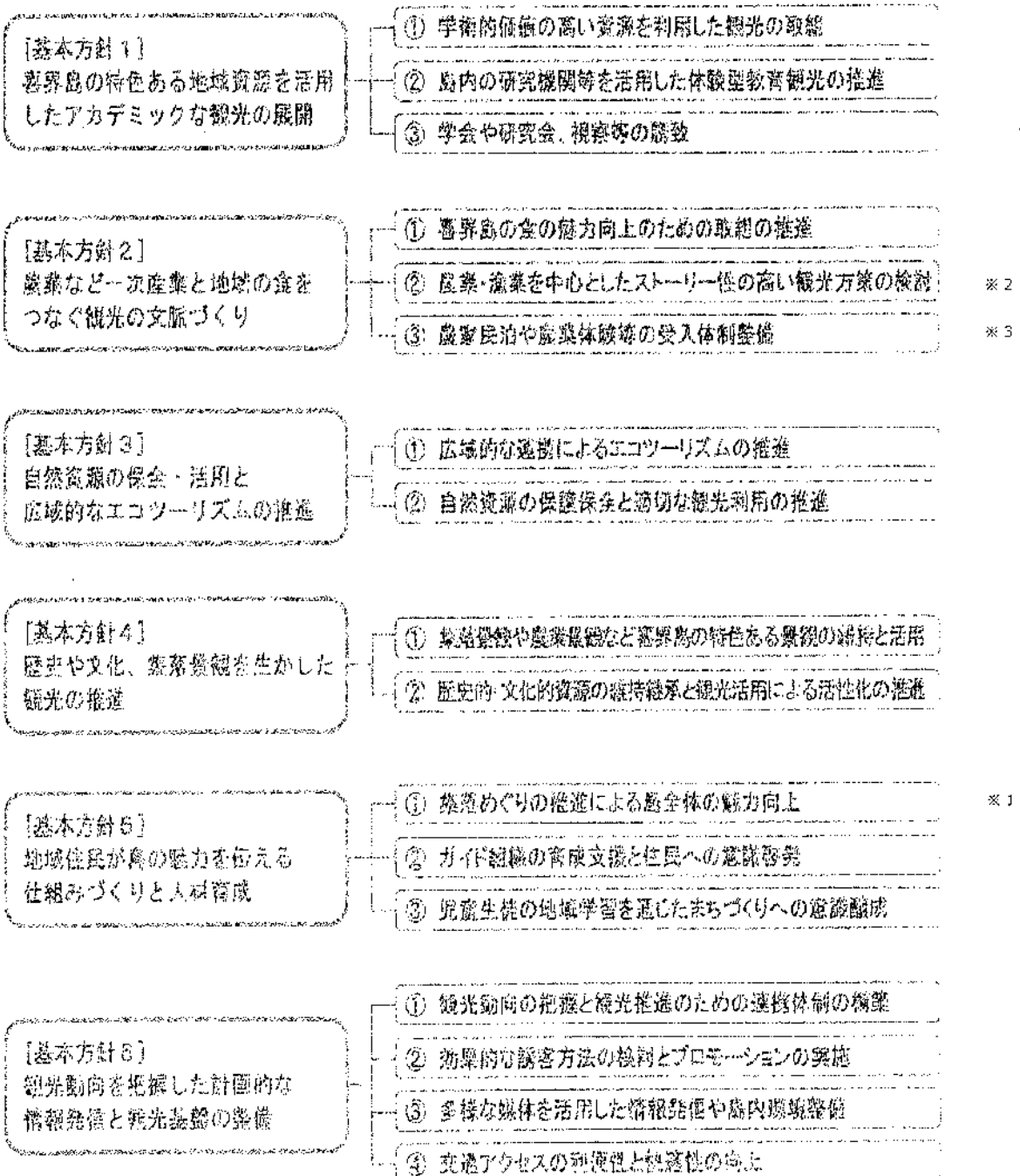
(4) 喜界町観光振興計画体系図（基本理念，基本方針，基本施策）

基本理念

- 1 島にある様々な資源を活かし、喜界島を知って楽しむ観光をすすめます。
- 2 島の暮らしや人との交流を通じ、行ってみたい島～喜界島～を目指します。
- 3 島を訪れた人と住んでいる人、ひとりひとりが喜界島を広く深く発信します。

基本方針

基本施策



2 久米島町について(面積, 人口ともほぼ同じ。徳之島の西約65kmにある硫黄島(無人島; 2.5km)も行政区)

(1) 喜界町との比較

沖縄県島尻郡久米島町
(沖縄本島から西に100キロメートルに位置)

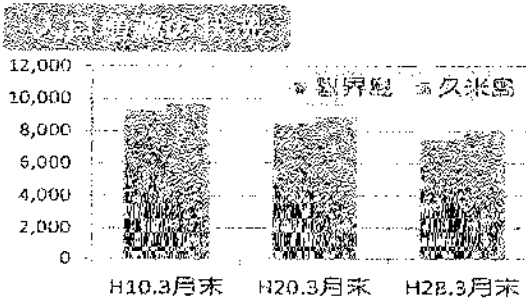
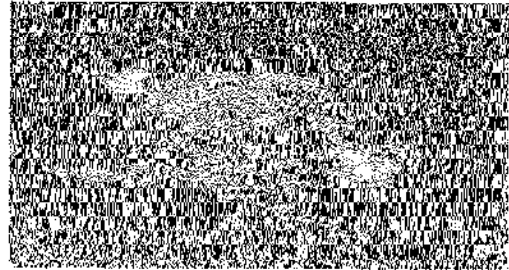


面積

喜界町 59,53ha 56,82km²

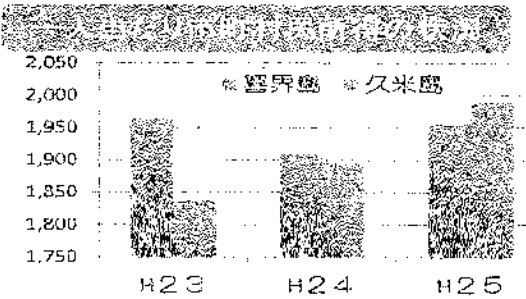
H28.3月末

人口 8,121人 7,524人



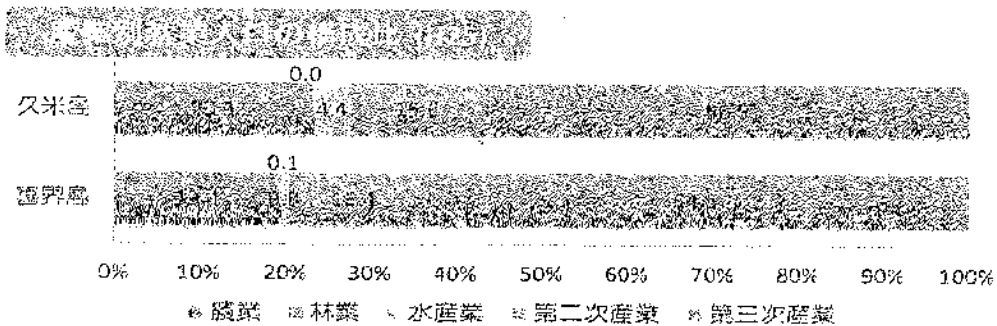
単位: 人

H10.3	9,287	9,694
H20.3	8,449	8,917
H28.3	7,524	8,121

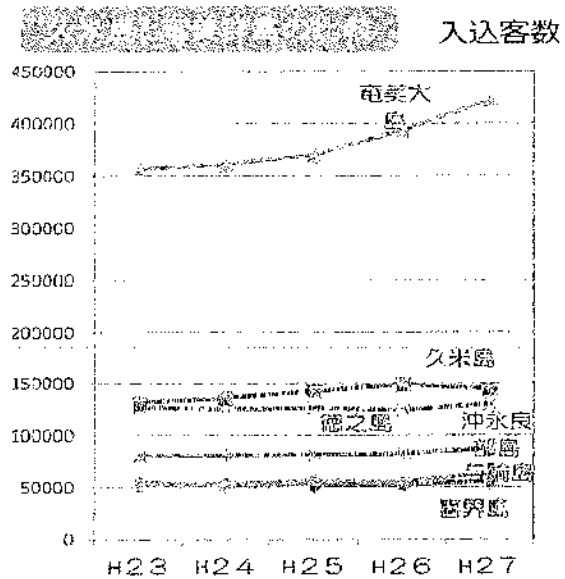
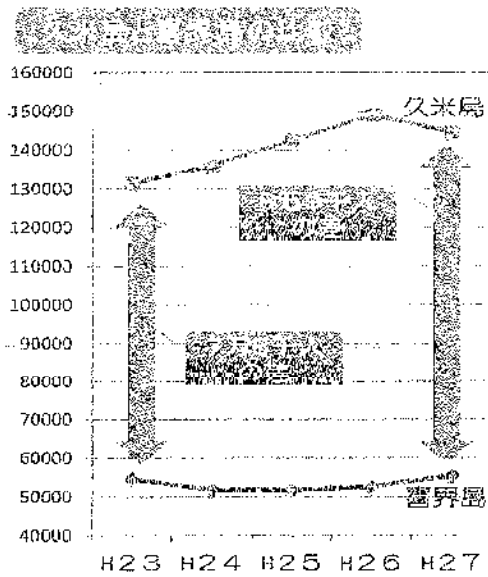


単位: 千円

H23	1,964	1,839
H24	1,910	1,896
H25	1,957	1,991



さとうきび	1,414,990	1,009,860	魚介類	28,299	312,938
畜産	713,789	624,420	もすく	X	363,330
野菜類	148,854	98,940	海ぶどう		379,500
花卉類	37,280	470,079	養殖エビ	X	1,075,588



(2) 久米島町の年間主要行事 (◆は、観光DVDで紹介されているもの)

- ・ 4月 海開き(上旬), 久米島ホテルまつり
- ・ 5月 宜野湾~久米島ヨットレース(下旬)
- ・ 6月 ハーリー, 沖縄角力大会
- ・ 7月 久米島ウミガメ館夏休み企画
- ◆ 8月 久米島まつり
- ◆ 9月 ハワイアンフェスティバル(リゾートホテル2か所を中心)
- ◆ 10月 久米島マラソン
- ・ 11月 久米島車えびフェスタ
- ・ 12月 久米島産業まつり
- ◆ 1月 久米島のんびりウォーク
- ・ 2月 東北楽天ゴールデンイーグルス春季キャンプ
- ◆ 3月 久米島トライアスロン(上旬; H15~)

(3) 久米島へのアクセス

① 飛行機便

- 沖縄本島・那覇空港から久米島空港まで 1日7便(約30分)

- ・ JTA(日本トランスオーシャン航空) B737-400

定員; 145名/150名 便数; 1日1便 (12:20那覇発/13:30久米島発)

- ・ RAC(琉球エアコミューター) DHC-8-100/-300

定員; 39名/50名 便数; 1日6便

※ 7月中旬から8月 東京から久米島空港まで 1日1便(2時間30分)

② 船便

- 沖縄本島・那覇泊港から久米島・兼城港まで 1日2便(約2時間50分)

(4) 久米島町視察後の雑感等

- 観光産業を島内経済発展の重要な産業と位置づけ国内からの観光客だけでなく世界からの顧客の獲得のために「全島テーマパーク化」を目標に観光施策を推進することとしているだけあって、島内に目玉となるような観光、スポーツ関連施設(あじま一館,久米島博物館,久米島紬ユイマール館,海洋温度差発電所,バーデハウス久米島,久米島シーサイドパークゴルフ,久米島ホテルドームなど)が充実している。
 - ・ 全国にパークゴルフ愛好者がおり、北海道も非常に盛んだということで、北海道の方から冬にチャーター機でこの久米島シーサイドパークゴルフ場に来るといふ旅行商品もある。
 - ・ 宿泊施設規模が大きいので、久米島まつり(8月),ハワイアンフェスティバル(9月),久米島マラソン(10月),久米島のんびりウォーク(1月),東北楽天ゴールデンイーグルス春季キャンプ(2月),久米島トライアスロン(3月)など年間を通じて大きな催し等が開催できる。
- 久米島は海洋深層水を活用した事業展開が幅広く,ミネラルウォーターやクルマエビ,ウミブドウ,カキの養殖,ホウレンソウの栽培などに活用していた。
 - ・ 産業として、海洋深層水を活用した地元の会社(化粧品会社(38名),海ぶどう養殖場(55名))や温浴施設(バーデハウス久米島(3セク)),海洋温度差発電所などがあるため、若者の雇用の場ともなっている。
 - ・ まだ実験施設ではあるが,海洋深層水を使った海洋の温度差発電を行っており、世界には久米島のほかハワイにしかないということであった。
 - ・ 食,おみやげにおいては、生産量日本一の車海老,海ぶどうに加えて、もずく,久米島鶏,泡盛など豊富な食材があり、食に関する資源が少ない離島では卓越しているといえる。
- (町,観光協会は)久米島の認知度が足りていない,「久米島」の名が浸透していないと感じており,テレビCMや県外での放送で紹介するなどマスコミを活用したPR活動に余念がない。
- 平成24年にFMくめじま(職員3名)を設立。FMができて,島内のいろいろな団体の動きが判るようになったとのこと。町からのお知らせ,災害情報,議会本会議の中継など様々な情報発信ができるようになった。
- 久米島高校の離島留学は,島根県の手士町が全国で先駆的に取り組んでいる離島留学について久米島町の議員や職員が手士町に視察に行って勉強をして,始めたとのこと。

(5) 喜界町はどうあるべきか（お金を掛けずにどうにかできないか）

- ・ 久米島の観光振興基本計画では、全島のテーマパーク化を目標に観光施策を推進するとされており、喜界島は圧倒的に施設では敵わないと感じた。
- ・ 喜界町は、誘導標識、看板を観光スポットの入り口に配置していないことから、きちんと配置することや観光パンフレットにトイレの設置場所を記載するなど費用の掛からない方法で充実させるのが大事だと思う。（平成28年度下期にほぼ実施済み。今後は、不要な看板の撤去も含めた検討が必要？）トイレの新設は、建設・維持管理費が掛かるので、難しいのではないかな。
- 同じく、あまり費用の掛からないものとして、商工会が作成したサイクリングコース案^{*1}などを充実させれば平坦な喜界島ではおもしろい取組だと思う。
- ・ 都市部は、「見る」スポーツ、「する」スポーツ両方とも可能であるが、地方はどちらかという自分たちで実際に「する」スポーツ(が大事)なのかなと思っており、島外から人を呼ぶ取組としてパラグライダーやダイビング、サイクリングなどの「する」スポーツは可能性が高いと思う。
- 地下ダム^{*2}を観光に組み込めないかと、焼酎等の長期熟成貯蔵地等(見せる場所)としてトンネルの活用を考え、九州農政局に目的外使用について協議。結果、目的外使用は認められたものの、エレベータの設置について、協議が進まないところ。
- 宿泊施設が足りないので、花良治の民泊^{*3}のような集落の空き家を活用した民泊施設の充実が図れば良いのでは。それには、所有者が貸しても良いと思えるような取組が必要。

※ *1, *2, *3は、P8の基本施策参照（のどれに該当するかを示した）

Ⅲ 喜界島の再生可能エネルギー等

島内完結型の再生可能エネルギー等の導入を推進する。また、町民が環境づくりが進んでいると実感できる施策に取り組みたい。

1 再生可能エネルギー等導入推進基金事業；GND基金事業 ⇒ 国庫事業

(1) 事業概要

- ・ 地震や台風等による大規模な災害に備え、避難所や防災拠点等への再生可能エネルギー等の導入を支援し災害に強く環境負荷の小さい地域づくりを推進する。
- ・ 事業期間は、平成26年度から28年度の3年間

(2) 太陽光発電・蓄電池等の設置(28年度) (資料P17参照)

- ・ 太陽光発電・蓄電池⇒ 喜界町役場屋上10Kw(蓄電池は庁舎2F)
- ・ 誘導外灯(3箇所)⇒ ①喜界町役場付近、②喜界園付近
③町総合グラウンド付近

2 二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金；GPP事業 ⇒ 国庫事業

(1) 事業概要

地球温暖化対策地方公共団体実行計画等に計上されたプロジェクトの実現に必要な設備導入等を補助し、自治体の創意工夫を活かした体系的な政策によって地域への普及が後押しされることにより、豊かな低炭素地域づくりを推進することを目的としている。必要に応じて、実現可能性調査・事業化計画の策定から設備補助までを包括的に支援する。

【実現が期待される地域像の例】

- ・ 域外へ流出していた資金が地域づくりにつながる社会
- ・ 地域資源の活用による市場創出・つながり創出
- ・ 温暖化対策が地域の活力になることを実感できる社会
- ・ 地域住民や地域コミュニティの「社会や生活の豊かさ」につながる持続的な取組の実現

(2) 喜界町の取組

平成27年度

第2号事業(実行計画等計上事業又は里地里山等地域の自然シンボルと共生した先導的な低炭素地域づくり事業の事業化に向けた調査の実施及び計画の策定) 採択による事業報告書の作成

- ① バガスを活用した木質バイオマスボイラ等の導入検討
- ② BDF(バイオディーゼル燃料)の実現可能性及びそれに係る導入設備の検討

(3) 喜界町への協力(平成28年度以降) (資料P18～P20参照)

- ・ 可能性のある(2)②について、町に協力
- ・ 町職員と数回の打合せ
- ・ 今後のあり方検討会を2回開催

※ 町議会議員は、別視察に併せてBDF活用先進地視察実施；霧島市

3 喜界町に適した再エネは？ (資料P22参照)

- 太陽光発電(蓄電池付き)
- 風力発電 ①可倒式 , ②比較的小型

※ 地下ダム揚水ポンプ用の風力発電が台風で壊れたことから、元々風が強い喜界島では風力発電は向かないという考えが定着したのではないか。ある意味風力発電アレルギー

- ・ (海洋深層水の活用が出来れば)海洋温度差発電

4 喜界町再生可能エネルギー事業化計画策定委員会の設置 (平成29年12月27日)

当委員会は、喜界町における再生可能エネルギー事業化計画策定調査事業に関して、必要な事項を調査、検討、協議を行うため設置されたもので、今年度中に、再生可能発電設備(風力、小水力、太陽光発電等)の賦存量調査・導入計画策定や公共施設のエネルギー使用量調査、再生可能エネルギー使用量調査、再生可能エネルギー運用システムの検討結果に基づく事業化計画の策定を行う予定。

喜界町では、平成15年の台風で600kWの風力発電が壊れ、撤去したことから、町民に風力発電アレルギーが残っていることもあり、調査に当たっては町民インタビュー等も行い、可能な限り町民の意見を反映することになっている。

この策定事業と合わせるように、民間業者が小型風力発電10kWを2基ずつ6箇所を設置する計画が進んでおり、既に2基が設置されたことから、現物を見て風力発電アレルギーが解消されること、また、今後策定報告書を元に再生可能エネルギーの普及が進むことを願うところ。

5 再エネ賦課金とは？ (資料P23参照)

IV 喜界高校生の職場体験学習受入 (資料P24～P31参照)

平成28年度から受入体制を整えていたが、平成29年度が初めての受け入れとなった。

1 目的 (高校側の)

学校では学び得ない望ましい勤労観・職業観を身につけさせ、実社会に対応できる社会人の育成に努める。

2 実施日

- ① 平成29年 7月25日(火) 1日
- ② 平成29年12月 5日(火)～12月 8日(金) 4日間

3 実習参加生徒数

- ① 商業科2年生 (23名;当初計画24名)
- ② 商業科2年生 (2名)

4 経緯(事務所側の目的等)

- ・ 喜界事務所が、喜界町の中でどのような仕事をしているか知ってほしい。
- ・ 職場体験を通じて、喜界町に愛着や興味を持ってもらい、将来喜界町のために(国、県、市町村、民間の立場等から)役に立つ人になってもらいたい。
そのために、目標を持って勉強してほしい。

5 職場体験学習に関するアンケート集計結果 (資料P27～P30参照)

V 喜界島の文学（から今昔の風景を思い浮かべる）（資料P32～P38参照）

まだ、喜界島のことをあまり知らない私からすると、安岡伸好という喜界町(坂嶺)出身の作家もいるが、喜界町の今昔の風景を思い浮かべ易いのが、安達征一郎の「小さな島の小さな物語」ではないかと思っている。

1 「小さな島の小さな物語」一あとがき一（資料P32参照）

この本には、10篇の短編小説がおさめられています。短編小説のお好きな方には気に入って頂けると思います。

小説の舞台になっているのは、九州の南端と沖縄の間に連なっている、奄美の島々の一つ、喜界島です。

僕はそこで少年時代を過ごしました。

湾岸通りの一角に、安達征一郎の文学碑が建っていますが、碑文を求められて僕はこう記しました。

僕は赤連海岸通りで
多感な少年時代を
過ごした
この無限の拡がりと
深みを持った小宇宙で
僕の作家の「魂」は
生まれた

にもかかわらず、僕はこれまでに喜界島を舞台にした小説を一作も書いていないのです。

僕が喜界島に住んだのは、昭和10年代の前後7、8年の事(S8～S16;7歳～15歳)でした。まだ電気もガスも無く、車も入っていませんでした。本土との交通は10日に1便くらいの割合で鹿児島からやってくる小型汽船だけでした。島の周りにスカートを履いたように伸びている手つかずのサンゴ礁は美しく磯魚の豊庫でした。農産品としてはサトウキビとカライモがよく取れたので島民のくらしは楽でした。だから、当時のおとなたちは暇があって、子供の僕とよくつきあってくれました。そこから生まれたのがこの本に収められている「小さな物語」10篇というわけです。

喜界島出身者と書界島を愛する人たちが関東で出している、『がじゅまる』という小雑誌があります。10年ぐらい前、その雑誌の編集をやっている芳本さんから何か書いてくれないかと依頼の電話がありました。ちょうど喜界島の事を書きたいと思っていた時でしたので、お受けして連載1回目の「赤連海岸通り」を書きあげて『がじゅまる』に出しました。

『がじゅまる』は1年1回の発行でしたので、10年がかりではありましたが「小さな島の小さな物語」を書きあげる事ができました(H7～H19)。

『がじゅまる』の連載が終わると、郷土の新聞「南海日々新聞」から話があり、今度は挿絵入りで連載がはじまりました。当時、僕は体調を崩し入退院をくり返してましたが、連載の挿絵には元気をいただきました。

我が国には、6,852の島があり、そのうち430の島が有人島ということです。

航空便の無い時代の離島の唯一の交通機関は船舶でした。どの島にも、島の大小に関わらず港町があり、とくに出船入船のある日には、大変な賑わいを見せていました。

喜界島の港町は赤連海岸通りでした。

喜界島の僕の友人、北島公一さんによると、赤連海岸通りというのは、今の農協コープの前から港を左に見て船着場までの100メートルくらいの道筋をいうらしいのです。

道の両側には、酒屋、糸満漁師の家、材木商店、船会社の代理店、自転車屋、菓子屋、旅館、農業会の事務所と倉庫、マールン船の親方の家、製材所、判亭、小料理屋などが並んでいました。

海岸通りの行き止まりは、コンクリートの棧橋になっていて小型船の船だまりでもありました。

この100メートル余りの町筋と、棧橋周辺の海が僕のエリアでした。

僕は自分でしゃべるよりも、人の話を聞くのが好きな少年でした。当時の人たちは「時は金なり」の思想とは無縁のゆったりした生活をしていたので、少年の僕を大人並みにあつかってつき合ってくれました。

「小さな島の小さな物語」の諸作は、その当時、僕が見たり聞いたりしたものです。当時は、人権意識もうすく、福祉制度もなく、精神安定剤を服用すれば、軽症で済んだはずのミツコは狂女になりました。

僕は「ミツコの真珠」を書きながら、ミツコの狂った頭が紡ぎだした、人は死ぬとマブリ(魂)になって巨大真珠の膜になるという霊的な幻覚に圧倒されました。

また、「待ちぼうけの人生」の山城太一の30余年に及ぶ行動の中に、ドン・キホーテ型の無償の情熱を見ました。

そして、「泡盛ボックワ」の中山勇作は、あだ名の屈辱感を煮えたぎらせて殺人者になったが、もし彼が今日に生きていたら、その海の勇者の気概と賢さからみて、相当の人物になったであろうと考えこんでしまいました。

あやの姿に、奄美の女性の子育ての苦労話というだけでなく、薩摩統治下学問がなく虐げられてきた、封建時代直後の子供の出世のために命を削ってきた奄美の女性の象徴的な姿を見ました。(「ハジイチ哀しや」)

この本の随所に顔を出している、ふじや旅館のフジナミさん、奥田旅館の奥田ばあさん、ちょっと謎めいた人物の磯さん、年を経るにつれて“すごい人”に見えてきた山城太一さん、もっともっとその人の事を書きたいと思っています。美人で才女の二胡奏者、仲間里沙さん(「喜界島のさくら」)、そして僕が読んでいる軽い読物の他に「文学」という芸術があることを教えてくれた八重子さん(「春になれば…」)、小悪魔的な魅力で僕を引きずりまわした、マールン船好きの加奈子さん。

皆、僕にとっての「忘れえぬ人びと」ですが、僕が赤連海岸通りにいるころ亡くなったり、またその後亡くなって、もう親しく口をきくことができなくなりました。せめてこの小説が、彼ら彼女たちの鎮魂になればと祈っている次第です。

2 「小さな島の小さな物語」の世界 森永克己(安達征一郎)のいる風景 一得本 拓一

(資料P33～P36参照；文中の丸付き数字と写真の丸付き数字は一致している)

(前略) 船舶事務所の前の十字路に、海を背にして立つ。ここが安達文学でいう赤連海岸通りの一端。

まんなかの道は湾に沿って延びており、島の中心地の湾・赤連集落の商店街はその先にある。

右は^①以前の船着き場。それがすぐそばに見える。昭和38年に名瀬・喜界間に就航した「くれない丸」が接岸していた埠頭である。鉄製の新造船として華々しくデビューした当時の、白い船体が今でもまぶしく思い出される。就航期間の末期には、エンジン不

調で漂流することもあり、いつまでたっても「日が暮れない丸」、そう揶揄されたりもしたが、庶民の足として親しまれ愛された船だ。

左側、東の空を見る。星空はまだ輝きを残している、その下には、緩やかにカーブした道路が街路灯に照らされている。ゆるやかな登り勾配の道で、先には酒造会社や自動車整備工場があり、池治・中間集落に到る県道バイパスである。その坂道の左途中に、石造りの古い倉庫がある。倉庫の前に自生している竜舌蘭と共に街路灯に照らされ、白く浮かんでいる。大正10年頃に、^②イシワリテージュ(石割ていじゅ)と呼ばれていた石工が建てた倉庫で、そこには、荷揚げされた石油が保管されていた。(中略)

左右を確認し道路を渡り、町の中心に向かって歩き始める。30メートルも進むと道路は右にカーブする。その手前の海側には、平成22年に建立された、^③安達征一郎文学碑が湾を背にして建っている。照明施設は無く、近くの街路灯が碑文正面に小さく反射している。ボランティアグループ「きばろう会」が共同^④製作したベンチが、記念碑の後ろに見える。

この周辺一帯は、奄美本島に沈む夕日を湾越しに眺めることができ、夕涼みには格好の場所であった。

塩浜につながる^⑤広場(イチリバナ)が段丘の上であり、戦後は、三味線やマンドリンを携えた若者達が集い、唄遊びなどに興じる交流の場であったという。ここで文学が語り合われたらいい、そんな思いもあり^⑥ベンチは文学碑の側に設置された。

右カーブした道路の突き当たりには、^⑦碓山旅館・旧喜界町商工会の建物があり、以前は、黒糖の検査場や大島から運ばれて来た原木の製材加工所もあった。

その向かいには、^⑧チッコ(築港)と呼んでいた、船をひき揚げる傾斜したコンクリートの基盤があった。鉄製のレールが敷設されており、それは2本の黒い線となって海中まで延びていた。

干潮時には、海藻・ノリが付着した部分が露出し、滑りやすいその部分は、子ども達には格好の遊び場でもあった。傾斜面をソロリソロリと移動する大人をしり目に、子ども達は、陸側から小走りに助走して海藻の手前でジャンプし、海藻付着面に接地し、そのまま身を屈めて海の中に滑り込んでいく。下手をすると大けがをしかねない危険な遊びだが、それを注意する大人はいない。

大人も子どもも大小さまざまな危険を引き受けながら生きていた。

小学生時代の大半を海で過ごした私の友人の話しがオモシロイ。昭和30年、40年代、娯楽の少ない島には、相撲やサーカスなど様々な興業がやってきた。プロレスもその一つで、近くの旅館にその一行が宿泊した。ジャイアント馬場が滑走を楽しむ子ども達を見て自分も試してみたいくなったのだろう。やおら真似をしてジャンプした。ところがあの長い足が災いし、巨体はバランスを欠いたまま宙に浮き、彼は後頭部からコンクリートに倒れ落ちた。子供達は大仰天、そして大喝采だったという。彼が、例のブーツ姿であったかどうか、それは聞かなかったが、ジャイアント馬場のリング外での珍闘であった。

今その現場は、接水面が切り取られ、鉄製レールは剥ぎ取られ、一部が露出したまま放置されている。チッコ自体も、コンクリート壁で遮られて、道路から見ることはできない。

人の移動が船から飛行機に変わり、旅館からビジネスホテルへと宿泊も変わりつつあった昭和50年代、海岸通りにはまだ4、5件の旅館があった。海岸通りに面して、^⑨2階立てのK荘があった。その二代目経営者は、面倒見のいい兄貴分で、おおらかな性分がお客にも好評で、離島ブームが去った後も常連客に利用されていた。

昭和58年8月24日未明、近くの飲食店で火事が発生した。火は瞬く間に拡がり、K荘

にも燃え移った。宿泊客の安否が確認できずにいたK荘の親父さんは、その救出のために炎上する旅館に引き返す。旅館の裏手に脱出した宿泊客は、鎮火後に無事が確認されたが、火の海に飛び込んだ彼は帰っては来なかった。1,350㎡を焼き、10世帯、32人が焼け出され、死者1人、40歳、と町広報誌には載っていた。

その^②K荘の跡はまだ更地のまま残っていて、その一画は、安達征一郎(森永克己)が島ですごした家であり、近くには、映画「島育ち」のロケでも使われた^③老舗の折田旅館がある。^④K荘の隣には、おばさん2人が経営していた食堂がある。姉妹だったのだろうか2人が出す島料理は、年期が入った味が好評で、島の調査・研究で図書館を訪ねる学生達と一緒によく通ったものだ。もう店を閉めてから長くなる。そういえば、よく来島し唄遊びに興じた伝説の唄者、里国隆がよく利用していた店でもあった。

さらに進む。右側、海岸側には、陸揚げされた漁船や釣り船が並んでいる。^⑤なだらかな傾斜を降りていくとそこは漁船の係留場。今はコンクリートで固められているが、以前は近隣の生活用水が流れ込む汚れた渚であった。靴やビンなど種々雑多なものが放置され、人開の営みがそのまま見えた。生活雑貨だけではない、現実の政治そのものが流れてくることもあった。米軍の射撃訓練の標的として使われ、漂流していた無人小型ジェット機が曳航され、長くそこに放置されていた。オレンジ色の機体を波打つ海は、当然、沖縄、アメリカとつながり、そして日米安保という現実ともつながっていた。40年程前のことである。

その漁船係留場の向かいには、^⑥高校の先生が下宿していた。柔道の先生で黒ブチの眼鏡をかけ頑強で無口な先生は、夕方になると道路そばのガードレール前によく立ち、遠くをながめていた。

卒業後しばらくして、その先生が脳腫瘍で亡くなったことを聞いた。今、そこに渚があったという面影はみじんもない。しかし、自らが存在していたことを証明するかのようにならずに砂地が露出し、その上に^⑦石積みの岸壁が残っている。積み上げられた石垣は後年コンクリートで補強され、^⑧その上に盛り土した造成地があり、駐車場として現在使われている。(中略)

叔母が守り抜いた^⑨秋元家の正門は、変形交差点に位置している。ここが赤連海岸通りのもう一端であり、海岸通りは、ここで始まりそしてここで終わる。その交差点を、更に直進すると^⑩天神通りで、その先には^⑪天神山の赤連側の鳥居がある。右に行くと^⑫中通りや^⑬本町通りがあり、その途中には、港で旅人を見送った後、必ず参拝し、航海の無事を祈った^⑭コンピラ様がある。船が着く港から、波がうち寄せる渚までの300メートルに満たない距離の赤連海岸通りである。

海は道であり、その道から、石油が来た、プロレスも、日米安保も来た。多くの物と一緒に、多くの人がこの港に降り立ち、そして港から出ていった。行った人、帰ってきた人、帰れずにいる人、帰って来なかった人。いろんな理由があり、それぞれの目的があって、人は港に着き、港を発った。彼らは一様にこの通りを歩いて行った。

赤連海岸通りの両端に、^⑮石造倉庫と^⑯石垣は建っている。幼少の森永克己(安達征一郎)が会った人たちを、同じように2つの建造物も見ていたのだろう。集落全体を焼いた空襲から生き延び、戦後の乱開発から生き延びた2つの建造物は、その時代の目撃者として今も立っている。

行政や団体・組織が書かれた歴史を刻む大理石の記念碑ではない。ごく普通の人たちが、一つ一つ積み上げたサンゴ石の建造物である。存在をアピールするわけではない、ひっそりと建ち、ただそこに在ること、それを誇るかのよう、その2つは建っている。

人は変わり、物事の価値も、時代時代の移ろいの中で変わる。そのような社会にあっても、変わらない人間の心の有り様を、安達征一郎は、『小さな島の小さな物語』の10

短編で書いた。人生という長い旅にあって、その、一時を赤連海岸通り界隈で過ごした人たちの普段の心の有り様を描いたところに、その短編の普遍性がある。普通の人々のごくありふれた生活の上に歴史は積み重ねられる。

時代に翻弄されながらも、自らの日々を誠実に生きた、多くの普通の人たち。彼らが以前ここに居たことをしっかりと証明するかのように2つの石造物は立っている。島の人たちが、日々の生活の中で見ていた、赤連海岸通りのランドマーク、その2つは今もしっかりと立っている。